

鈴木大拙の年譜における誤りと空白

——第四高等中学校・小学校教師時代——

浅見 洋

〔論文要旨〕 本稿は、鈴木大拙の十七歳から二十歳まで、即ち、第四高等中学校、小学校教師時代の年譜を問題にしている。というのは、これまでのこの時期の年譜は、空白が多く、不十分なばかりでなく、新資料に基づいて判断する限り、ほぼ全面的に訂正する必要があるからである。新資料とは、(1)「第四高等中学校一覽」、(2)「第四高等中学校成績原簿」、(3)「飯田小学校沿革史」、(4)「美川小学校沿革史」等である。

(1)、(2)によって、大拙が第四高等中学校の予科で、貧困のため落第したこと、学友西田幾多郎等と結成し、切嗟勉勵したと伝えられた「我尊会」に加わっていなかったことが明らかになる。(3)、(4)によっては、飯田、美川両小学校在職期間、越中国泰寺における最初の参禅の時期とその機縁の訂正が求められる。

また、訂正された年譜に基づいて青年大拙の歩みを再構成すると、晩年の大拙の思想と活動の萌芽が、既にこの時期の生活や苦悩の中にあることが明らかになる。

〔キー・ワード〕 鈴木大拙、禅、年譜、我尊会

序

思想史上の巨人たちの経歴は、可能な限り実証的資料に基づいて、正確に記されることが必要である。それは単に、思想形成、人格形成の正確な時期という問題ばかりでなく、その背後にある生活環境・生活体験への洞察、理解が、当の思想、人格を理解する上で、極めて重要だからである。

「世界の禅者」鈴木大拙の場合、これまで最も信頼されてきた年譜は、大拙の高弟古田紹欽、秋月龍珉両氏の手になるものである。大拙が十七歳から二十歳まで、即ち第四高等中学校在学中、飯田、美川小学校教師時代の年譜、伝記的な記述、辞典類の紹介等も、概ね、両氏の年譜を踏襲し、或いは、これに基づいている。古田氏によれば、鈴木大拙の右時期年譜は、以下の通りである。⁽¹⁾

明治二十年（一八八七年） 十七歳

九月、石川県専門学校は第四高等中学校と改称、同校予科三年に編入さる。

明治二十一年（一八八八年） 十八歳

九月、第四高等中学校本科一年に入學す。（中途退學。）

明治二十二年（一八八九年） 十九歳

石川県珠洲郡飯田町飯田小学校高等科英語教師となる。

明治二十三年（一八九〇年） 二十歳

四月八日、母、増歿す（六十一歳）。

「明治二十三年四月二十八日より同二十七年四月二十七日マデ四ヶ年間、小学校英語科教員タルコトヲ仮免許ス」(石川県知事)。

五月 「任石川県石川郡高等科美川小学校訓導」(石川県)、「五等下級俸ヲ賜フ」(石川県)。

この頃、富山県国泰寺に行き参禅す。

明治二十四年(一八九一年) 二十一歳

一月 「美川小学校訓導依願免本官」(石川県)。

この頃上京す。

秋月氏による年譜(『鈴木大拙の言葉と思想』)は、古田氏のものより簡略であり、より多くの文献がこれを踏襲している。⁽²⁾

一八八七年(明治二十年) 十七歳

石川県専門学校付属初等中学を卒業、この年学制改革となり、西田幾多郎らと共に、新製の第四高等中学予科三年に編入されたが、まもなく家計の都合により中退する。

一八八九年(明治二十二年) 十九歳

能登の飯田小学校の代用教員となる。

一八九〇年(明治二十三年) 二十歳

加賀の美川小学校訓導となる。

以上の二つの年譜の最も大きな相違は、第四高等中学校の中退時期に関する記述であり、他はほぼ同一といっていよい。また、これらの年譜は、年代上、空白が多く、不十分なばかりか、新たに見出された数点の資料に依って判断す

る限り、ほぼ全面的に改める必要がある。

この小論の目的は、新しく発見された資料によって、青年大拙の年譜を訂正し、これによって大拙の人格形成に於いて最も重要であり、かつその人生の方向を決定づけたと思われる、この時期の青年大拙の心の軌跡をより明確にすることを意図している。

一 第四高等中学校退学と我尊会

明治十九年四月、文部省は学校令を公布し、中等教育は中学校令、高等中学校令によって規定されることとなった。その内容は、一府県一校を原則とした尋常中学校の設立と、全国を五区に分け、各区一校の高等中学校の開設を骨子としていた。第四高等中学校は石川県専門学校、石川県甲種医学校を母体として金沢に設置された。この際、両校の在校生の大部分は、改めて二十年十月に入学試験を受けて、学力相応の学年に編入されたのである。志願者総数百四十二名、入学者は本科一年六名、予科第一級十六名、第二級二十四名、第三級四十二名の総計八十八名であった。同年十月二十六日、文部大臣森有礼を迎えて開校式が挙行され、翌二十七日から専門学校の校舎を利用して授業が開始された。その中に、専門学校からの編入生鈴木貞太郎も含まれていた。

第十八章

生徒姓名

(明治二十年十月調)

理科第一年

伍長

井上友一

石川

松本文三郎

全

松井喜三郎

同

現在、金沢大学付属図書館に残されている二十年度（明治二十年十月～二十一年七月）の『等四高等中学校一覽』の『生徒姓名（二十年十月調）』（参照 資料一）には、貞太郎の名は西田幾多郎、藤岡作太郎等の名と共に予科第一級に見いだされる⁽³⁾。上級の本科、理科第一年には、Z項の発見者木村栄や印度哲学者松本文三郎等が、下級には憲法学者清水澄、外務次官倉知鉄吉等が名を連ねている。貞太郎は『鈴木大拙全集』の年譜のように九月に予科三年にはなく、十月に予科第一級に編入されたのである。更に、右年譜のより重大な誤解は第四高等中学校中退に關してである。

金沢大学文学部学生課に保管されている明治二十年度の『第四高等中学校成績原簿』（参照 資料二）でも、貞太郎の名は予科第一級に見出され、成績判定は十六人中最下位で落第（平均点四五・七）である。この判定は「学年末試験点」が数学三角法を除くと全科目零点であることと、百点満点の行状点が全てマイナスされたことによる。行

| | | | | | |
|---------|----|-------|---|---------|---|
| 木村 栄 | 同 | 高崎勇次郎 | 全 | 内田雄太郎 | 同 |
| 豫科第一級 | | | | | |
| 藤岡作太郎 | 石川 | 西田幾多郎 | 全 | 伍長 田良吉 | 同 |
| 長谷川貞一郎 | 石川 | 川越宗孝 | 同 | 鈴木貞太郎 | 同 |
| 松寺竹雄 | 同 | 横山正誠 | 同 | 伍長 福島淳吉 | 同 |
| 米山良輝 | 同 | 坂井乙吾 | 同 | 宮本己一郎 | 同 |
| 伍長 大橋永頼 | 同 | 岡三治郎 | 同 | 岡島克照 | 同 |
| 亀田外余次郎 | 同 | | | | |

(資料一)

| (6) 鈴木貞太郎 | | | | | | |
|--------------------|------|------|--------|------|------|--|
| 落第 | | | | | 16 | |
| 第一學期 | 第二學期 | 第三學期 | 平常平均点数 | 學業年點 | 學評年點 | |
| 80 | 55 | 0 | 45 | 0 | 30 | |
| 90 | 95 | 0 | | 0 | | |
| 73 | 72 | 33 | | 0 | | |
| 77 | 69 | 75 | 74 | 0 | 49 | |
| 35 | 68 | 83 | 62 | 0 | 41 | |
| | | | | | 45.7 | |
| | | | | | 457 | |
| | | | | | 0 | |
| 科業ヲ休マントシテ 教員ヲ欺ク | | | | | -5 | |
| 無届欠 | | | | | -90 | |
| 遅刻 | | | | | -5 | |
| | | | | | -100 | |
| | | | | | 457 | |

(資料二)

状点のマイナスは、無届欠席が九十点、遅刻が五点、「科業ヲ休マントシテ教員ヲ欺」いたための五点である。極度の貧困の中にあつた貞太郎は、退学を決意して欠席がちになり、学年末の試験を受けなかつたものと思われる。晩年に、大拙は、次のように述懐している。「やめたのは、授業料が出せなかつたのだ。こんな暮らしをやつてゐては、到底長持ちができませんといふので、やめなくちゃならんことになつたんだが、今考へて見ると、その授業料といふのが月に十銭ではなかつたかと思ふ。」⁽⁴⁾しかし、三学期の平常点の大部分は記されており、他の中退者たちのように、中退、或いは退学との書き込みもないことから、二十年度末(二十一年七月)までは在籍していたと考へてよい。後述するように、二十一年八月には飯田小学校に勤め始めているので、落第と同時に正式な退学の手続きがなされたと推測される。このため、二十一年度の『一覽』(二十一年十月調)中には、本科は勿論、予科にも彼の名前を見いだすことができない。彼自身『自叙傳』で「私は予科を卒業しないでやめてしまつたのだ」と述べているのである。⁽⁵⁾それにも関わらず、本科入学という誤りが修正されずに現在に至つたのは、不可解と言わざるを得ない。また、秋月氏の年

譜のように高等中学校編入後、間もなく中退した、とするのも不正確であることは言うまでもない。大拙がその生涯で手にした卒業証書は、石川県専門学校付属初等中学校のもののみであった。

本科入学という誤解は、大拙に関する文献のみならず、西田幾多郎や藤岡作太郎についての伝記的な記述の中にも影響を与えている。例えば、西田の文献には、しばしば次のような表現が見うけられる。「明治二十一年、十八歳。

先生は、第四高等中学校第一部一年に在学しておられる。翌二十二年五月、級友藤岡作太郎（東圃）、松本文三郎、鈴木貞太郎（大拙）、金田（山本）良吉らと我尊会を結成し、文集を作り、互いに切嗟勉励した。」⁶「我尊会」とは、

良吉が「同趣味の数人が文会を作り、各自の文を一ヶ月に一回づつ持ちより、一冊に綴ちて廻覧批評した」と紹介しているように、回覧紙上で文章や詩歌を作り、相互に批評を書き込み合うとともに、題を定めて論説を披露し合うような文会であった。結成時は、『我尊会有翼文稿』の扉に、有翼（西田の雅号）自身の筆で「此會始于二十二年五月

終翌年七月」と記されている。⁸とすれば、我尊会は鈴木貞太郎中退後に結成されたものであり、同級生の貞太郎と西田幾多郎等がこの会で切嗟勉励したとするのは明らかに誤りである。それ故、金田良吉は我尊会の説明を次のように

続けている。⁹「その会員で今尚存命中には上級生の松本文三郎博士、西田君、前明治専門学校友田鎮三君位かと思ふが……。」もし、大拙が我尊会会員であるならば、積極的な著作活動の真中にあった大拙の名が抜け落ちること

はないであろう。（この文は昭和十五年に書かれている。その時大拙は七十歳である。）貞太郎が我尊会に属していたとする誤りは、彼が本科に入学し、西田等と机を並べていたとする年譜の誤りに影響を受けているのである。

また、大拙と我尊会の結びつきを窺わせたものとして、『有翼文稿』の「与鈴木兄」と題する二首の漢詩がある。¹⁰

晚風微動清涼催 明月懸空似玉珠

哲学妙玄人無職 清宵月下夢韓囚

除去功名榮利心 独尋閑処解塵襟

窓前好読道家冊 日明清風払俗塵

貞太郎には、若い頃から脱俗の風があり、恵まれない境遇にありながらも、勉学と思索に耽る日々であったようである。この詩が書かれた頃は、後述するように、美川小学校に勤務しており、週末ごとに金沢に帰宅していた。だからといって貞太郎を我尊会の一員とすることはできない。というのは、西田は、明らかに我尊会の一員でない者に対しても「与——兄」と題する詩を文稿に記しているし、漢詩中の「独尋閑処——」とは、会員たちとの交流の輪の外にいる貞太郎の姿を想像させさえもするからである。『我尊会有翼文稿』の中にある多くの批評は雅号で書されているので、誰のものか確定することは困難であるが、少くとも、貞太郎のものと思われるものは存在していない。また、あれほど沢山の我尊会の思い出を記した会員たちの中にも、我尊会と大拙の関係を窺わせるようなものはない。⁽¹¹⁾大拙自身も回想の中で、専門学校時代に藤岡等と作った『明治餘滴』については言及しているが、「我尊会」については何ら記していないのである。

二 最初の参禅

貞太郎は「我尊会」に属していなかった。しかし、彼が西田、藤岡、金田等、近代日本の思想界・文学界の逸材たちと友情を育んだのが、石川県専門学校、第四高等中学校在学中である事は疑いようがない。その交流は彼らの高

弟をして「傍で見ている羨しいほどであった」と語りしめるほど麗しいものであった。この仲間たちの二十年度の『成績原簿』には、揃って「科業ヲ休マントシテ教員ヲ欺ク」という書き込みがあり、各人五点マイナスされている。⁽¹³⁾「青年の客気に任せて豪放不羈、何の顧慮するところなく振った」という西田の回想のごとく、若者たちは縦横無尽に、かつ一致団結して行動した。寡黙で、重厚な印象を受ける晩年の彼らからは想像しがたい青春の「齟齬」である。書き込みの幾つかには（本）と署名されていることから、記入者は英語、地理、理財学等を担当した教官本間六郎であると推察される。本間は角帽に金ボタン、白馬に跨がって登校したという新進の文学士であった。しかし、その語学力には問題があり、若者たちの反抗と嘲弄の的となったと思われる。また、西田の回想によれば、仲間たちは兵式体操の時にもしばしば抵抗を試みた。創設時の第四高等中学校は、校長の柏田盛文を筆頭に薩摩人が重きをなし、規則づくめで武断的な雰囲気か漂っていた。加賀の藩校明倫堂の流れを汲み、家族的で学究的であった専門学校出身の生徒たちには甚だ耐え難いもののようにであった。大拙は後に「気風の上で薩摩の人と加賀の人と合はなかったの知らんが柏田といふ校長に對して大分みな反感を持ってゐたやうだ」と述べている。⁽¹⁵⁾大拙の退学は貧困を主因とするが、金田、西田の退学は、薩摩隼人森有礼を頂点とする明治政府の教育政策に対する反発であったとも考え得る。老境に至って、西田は「私といふものができたのは、高等学校時代の友人関係であると思ふ。それが今日まで私といふものの基礎となつてゐる様に思ふ」と述べ懐している。⁽¹⁶⁾貞太郎の人格形成に関しても、この時期の友人関係は見過ごすことができない。

加えて、禅者大拙にとっては、友人関係以上とも思える、もう一つの重要な出会いがあった。貞太郎の在学と前後して専門学校、高等中学校で数学、理科と、時に英語を担当した北条時敬との出会いである。後に東北帝国大学総長、学習院長等を歴任するこの希有の教育者は、生徒たちに坐禅を奨励、鼓吹したのである。北条は、東京帝国在学

中、大拙の師ともなる鎌倉円覚寺の今北洪川の下で参禅しており、時折、禅会を催していた。最も熱心な参加者は西田であった。禅会には西田哲学の形成に大きな影響を与えた越中の国泰寺管長雪門が、月毎に招かれていた。貞太郎は、直接この会に参加しはしなかったが、雪門の噂を聞き、国泰寺を訪れた。

金沢から国泰寺の所在地高岡までは徒歩と馬車で一日がかりの旅であった。誰の紹介状も持たず、北条が活字本にしたという白隠の『遠羅天釜』を一冊持っていった。雪門は生憎留守で、一〜二日、雲水の言うまま坐禅をなした。雪門に会った時のことを大拙は次のように述べている。『遠羅天釜』といふのは、やさしい本のやうだが、禪宗用語があり、文字のわからんことがいくらでもある。それで、これはどういふ意味ですかといふやうなことを聞いた。さうしたら雪門和尚が大いに怒って、そんな馬鹿なことを聞いてどうするんだといふやうなことで、一遍に叱られた。⁽¹⁷⁾ほとんど収穫のない四〜五日間の参禅体験であった。

古田氏の年譜のように、この最初の参禅を明治二十三年（二十歳）の頃とすることは誤りと思われる。次の二点からである。一つには、この参禅は北条が金沢で禅会を催していた頃の出来事だということである。北条は、大学院入学のため二十一年の九月十日に第四高等中学校の職を辞し、第一高等中学校に転じている。⁽¹⁸⁾第二に大拙が回想の中で「家を離れて遠いところに出たのは生まれて初めてだった⁽¹⁹⁾」と述べており、高岡より遠方の飯田で教師になる（二十一年八月）以前であることは明らかである。それ故、大拙の最初の参禅は中退直後、或いは中退を決意した頃とるのが妥当だからである。更に、国泰寺への参禅が二十一年頃とすれば、しばしば伝えられてきたように、坐禅への発心は、母の死（二十三年四月）を機縁とするのではない。むしろ、学業中途にして挫折せざるを得ない己の運命に対する問い掛けこそが機縁ではなかったか。大拙自身、次のように述べている。「私が十七か、十八の頃、こうした不運が自分の業（Karma）について考えさせはじめた。それから私の思索は哲学的、宗教的問題へと変り始めた。私の

家族が臨濟禪に属していたように、私がいくつかの問題の解答を禪に求めたのは自然なことであった。⁽²⁰⁾（英文）筆者（訳）中退という貞太郎の人生における「業」は父良準の死（明治九年、貞太郎六歳）、明治維新に於ける武家社会の崩壊にまで溯る。鈴木家は先祖代々加賀百万石の上席家老本多氏の待医だったのである。一時期、貞太郎はこうした問題の解決を基督教に求めている。⁽²¹⁾しかし、結局は先祖の宗教へと回帰し、その中で解決を求めようとした。それは貞太郎自身の意志によるものであったが、ここに、北条や友人たちの影響を見過ごすことはできないであろう。

三 飯田小学校教師時代と蛸島

助手

五円

明治二十一年八月 二十二年一月解職

鈴木貞太郎

（資料三）

従来、貞太郎が飯田小学校に奉職したのは、明治二十二年（十九歳）だとされてきた。こうした解釈がなされてきた根拠は、大拙自身の次のような回想にあると思われる。「徴兵検査は、學校をやめてしまつて、やはり小學校の先生をしてをった時に受けたな。小學校の先生になったのはその前だから十九歳の時かな。⁽²²⁾しかし、現在の飯田小学校に保存されている『沿革史』には、「助手、五円、明治二十一年八月、二十二年一月解職、鈴木貞太郎」（資料三、参照）と記されている。この資料を信ずる限り、貞太郎は中退後、時をほとんど経ずして金沢を離れており、これまで年譜で、貞太郎が勤め始めたとする二十二年には、一月早々、既に職を離れているのである。十八歳の時である。

珠洲郡飯田町は奥能登の中心地であり、当地の小学校には郡内で唯一の高等科が設置されていた。当時の高等科に

は選択科目として英語があり、貞太郎は英語担当の助手として任用された。授業生、或いは助手の資格は、師範学校下等科以上の卒業生で、年齢十七歳以上であり、任命権は郡区長にあった。彼の在学していた石川県専門学校の前身の一つが師範学校であったため、その初等中学科を卒業していた彼は資格を満たしていたのである。就職の世話をしたのは、飯田の隣村、蛸島の小学校で校長をしていた長兄元太郎であった。⁽²³⁾

元太郎、貞太郎の兄弟は蛸島村の漁師上野豊左エ門家に止宿し、貞太郎は、木枯の吹き荒ぶ秋から冬にかけての内浦を、飯田まで歩いて往復した。飯田と蛸島の道程は約一里である。上野家は漁村蛸島の網元であり、当村随一の素封家畠山家の分家である。現在の畠山家は無人であるが、その宅地は間口廿三間半、奥行廿六間、約六百坪の広大なもので、他に普通蔵、嫁蔵、米蔵、土蔵二棟等が現存し、往時の豊かさを偲ぶことができる。鈴木兄弟はこの邸宅にしばしば招かれたようである。『自叙傳』には「蛸島の漁を取る本元……、今も一度行って見たいと思ふことがある⁽²⁴⁾」が、それは大きな家なんだ。この畠山といふところへ時々呼ばれてでかけていったことがある」と記されている。当時の家主は、蛸島村の初代村長になった畠山雄之助氏であった。学友たちから遠く隔たった寒村にあって、この有力者からの招待は貞太郎にとって、大きな慰めであったに違いない。

畠山家は、いつの頃からか、上野家と号してきたので、村民たちは転訛させて「ウエンニヤサマ」と屋号を用いていた。分家の上野はこの屋号を姓として用い、また、近隣にある真宗寺院上野山光行寺の名称は、寺領が上野家の寄進によることを示している。貞太郎が蛸島に住んでいた頃の寺の住職は英壽證氏であり、住職の息子巖友氏と鈴木兄弟の間には親交があった。巖友から唯識派の書『百話問答』の教えを受けたことが大拙の回想記中に記されている。⁽²⁵⁾ 巖友は、当時の奥能登では希に見る博識で、漢詩を能くし、英独仏語にも通じていた。⁽²⁶⁾ 更に、彼は東本願寺の第一回留学生としてオックスフォードに学んだ梵語学者、南条文雄と親交があったばかりか、文雄のライバルとして留学期

補者名簿にも名を連ねたという。蛸島では大拙が英語を教え、嚴友が主に漢詩を教えたと伝えている。

当時、寺の裏には権左エ門（浜田姓）と呼ばれる駄菓子屋があり、鈴木兄弟もしばしば菓子を購入した。晩年の大拙が、菓子代（十六銭）を支払っていないのを思い出し、使者に当時の代金に相当する金子を持たせた処、使者は代金を渡さず戻って来た。というのは、この駄菓子屋が、水産会社をはじめ、教社を経営する蛸島随一の資産家になっていたからである。その為、少額の金子では失礼と、大拙自身の手になる色紙を送ったという。宗教家大拙の心暖まる真実に触れる思いのする逸話である。

大拙は、とりわけ、『日本の靈性』以降、真宗の妙好人の発掘に力を尽くした。「浄土系信者の中で特に信仰に厚く徳行に富んで居る人を妙好人と云って居る。彼は、学問に秀でて、教理をあげつらふと云ふがはの人ではない。浄土系思想を自らに體得して、それに生きて居る人である。」⁽²⁷⁾妙好人の一人に、珠洲郡宝立町檀原の栃平ふじがいる。

宝立は飯田から、蛸島とは逆方向に一里の道程にある。大拙は奥能登の地で、大地に根ざして生きる素朴な真宗の信者たちに数多くめぐり会ったのであった。

その時期までに、彼は幾点かの禪書に触れ北条、雪門等とも出会っている。とはいえ、青年大拙の身の周辺には、なお、真宗との関係が色濃く漂っている。秘事法門の洗礼を受けたという母、⁽²⁸⁾蛸島の光行寺、後述する美川の徳證寺等である。そこで、日頃、彼がふじのように素朴な阿弥陀への信仰に生きる人々と接触したことは疑う余地がない。こうした生活体験は、貞太郎の後年の傾向、即ち禅思想と浄土系思想、とりわけ、真宗思想が究極に於いて共通するという立場、或いは『教行信證』より『歎異抄』を評価する姿勢となつて表われていると思われ⁽²⁹⁾る。

四 美川小学校教師時代

明治二十二年の新春早々、半年余りで貞太郎は蛸島を離れた。これには、二つの理由が考えられる。一つは、兄元太郎の転任である。転出先は明らかでないが、二十一年末に蛸島小学校長の職を離れている。恐らくは金沢、或いはその近郊に移ったのであろう。というのは、二十二年七月十五日に、元太郎の妻が女兒を死産し、埋葬した記録が、鈴木家の菩提寺（金沢市本多町、瑞光寺）に残されているからである。今一つは貞太郎自身が加賀の能美郡美川小学校に新たな職を得た事である。美川は金沢から五里ほどの距離にあり、病気がちで、老いつつあった母の住む実家からは能登の飯田に比して、遙かに近かった。

明治二十二年

一月十四日 安西与三男ハ簡易科美川小学校補助教員ヲ命ゼラル（月俸六円）ヲ命ゼラル

全廿五日 鈴木貞太郎ハ高等科美川小学校英語教師（月俸八円）ヲ命ゼラル

(資料四)

美川で職を得た時期は、これまでの年譜では、二十三年五月とされてきた。「明治二十三年四月二十八日ヨリ同二十七年四月二十日マデ四ケ年間、小学校英語科教員タルコトヲ仮免許ス」（石川県知事）と記された仮免許状と、「任石川県石川郡高等科美川小学校訓導」（石川県）「五等下級俸ヲ賜フ」（石川県）とする任命証が残存しているからであろう。二十三年四月に仮免許を受けた貞太郎が五月に美川小学校に訓導として採用されたと解されてきたのである。しかし、美川小学校の『沿革史』には二十二年度一月二十五日の日付で、「鈴木貞太郎ハ高等科美川小学校英語

教師（月俸八円）ヲ命ゼラル」（資料四、参照）とある。まだ免許状は所有していなかったが、二十二年一月には、既に職に就いていたのである。仮免許取得の一年四ヶ月も前の事である。ここは、飯田小学校を辞して、直後、美川小学校に職を得たとすべきであろう。身分は英語担当の補助教員であった。

美川への主な移転理由の一つは、先述したように、家の半分を貸した家賃で生計を立てている、病気がちの母への心遣いであった。「私は金沢の実家から五里（十五マイル）ほど離れた町、美川で改たに教師になった。再び母と遠く離れることになったが、週末毎に、彼女に会うために歩いて帰ったものである。五時間ほどの道のりだったので、学校に間に合うために、月曜日の朝、午前一時頃には家を出なければならなかった。しかし、私はいつも、できるだけ彼女と共にいたいと思ったので、可能な限り家に止っていた。」⁽³⁰⁾（英文―筆者訳）母増は、大拙が「桔梗の花を思わせるひと」と形容したように、清楚で、北陸人らしく、信仰心（特に真宗）の篤い婦人であったらしい。彼女は二十三年四月八日、六十一才で亡くなった。死因は父親と同じく、流行性感冒の後、肺炎を引き起こしたためとされている。貞太郎は臨終の時金沢にいたが、何故か立ち会えなかった。「臨終には会えなかったが、納棺後ふたをあけて死に顔を見た。どんな様子であったかは、まったく覚えていないが、その時の感情は今に残っている。それは、母の死骸はここに収まっているが、母は決して死んでいないということであった。なぜ、そのように感じたかはわからぬが自分母を見てそう直感した。」⁽³¹⁾半世紀以上を経た大拙の述懐である。

母の死の悲しみも癒えぬ頃、貞太郎は美川の真宗寺院徳證寺で下宿生活を始めた。徳證寺の先代住職新田法秀氏の志備録には「明治二十三年五月、明治二十四年一月、寄留、鈴木貞太郎」と記されている。美川小学校在職期間に於いての、これまでの記述に、この志備録も影響を与えていると考えられる。徳證寺への紹介者は、当時の美川小学校長で、先にこの寺に下宿していた山下義乾であった。徳證寺で生活を始めるまで貞太郎が何処に住んでいたか明らか

でない。この時期に住居を変えた主な原因には二つのことが考えられる。先ず、母の死と、母の死後、生家が借金返済のため三百円で売却されたことである。彼には、最早や、帰るべき家も、両親もなかったのである。更に、貞太郎がこの五月、任命証にあったように正式の訓導になったことである。こうした事情のため、貞太郎は美川の地に腰を落ち着けようとしたのではなからうか。『石川県学事年報』によれば、この年の尋常小学校教員仮免許取得者は男ばかり十名であった。

徳證寺での貞太郎は、寡黙で、絶えず机の前であったという。寺には、その頃貞太郎が読み、周囲の人々に読むことを勧めたという『真宗假名聖教』が残されている。⁽³³⁾ また、大拙は「英語のアンカ」と親しまれ、⁽³⁴⁾ 現任職の叔母、新田柳氏や藤塚神社称宜の子息(当時の)等は、小学校で英語を習った。美川では、貞太郎がこの頃、英語の辞書を全て暗記したという話が伝わっている。

貞太郎は、一度も正式に英語教師になるための教育を受けたことがなかった。その彼が英語を教えるようになったのは、在学した学校の教育方針と無関係ではない。石川県専門学校は、外国語(特に英語)で専門の授業をすることを目的としていたし、この伝統は初期の第四高等中学校にも、そのまま引き継がれていた。⁽³⁵⁾ こうした教育方針と二度の小学校教師の生活は、貞太郎が「世界の禅者」大拙となるための基をなしている。勿論、貞太郎は後に、「私がこの頃教えた英語は、とても奇妙なものであった。それで後に、私が最初アメリカに行った時は理解してもらえなかった」⁽³⁶⁾ (英文―筆者訳)と述べてはいる。しかし、一見、回り道とも見える田舎町の英語教師の生活が、後の繚宗演の万国宗会議発表原稿の翻訳、渡米、ポール・ケイラスへの協力、『大乘起信論』の英訳等へと通じているのである。大拙が西欧への禅の紹介者になり得たのは、語学力に負うところが多い。彼の語学の才には生得のものがあつたことは確かであるが、生活の糧を得るために選ばざるを得なかった教師生活も、後の成功のため、一役担っていると

考えることができる。

美川小学校の『沿革史』に「明治二十四年一月二十六日、二十二日付ヲ以ッテ訓導鈴木貞太郎依頼免官ノ辞令本日到着ス」という記事を残して、貞太郎は故郷を離れた。神戸の兄を頼って旅立ったのである。その時、北陸の地には、貞太郎の東京遊学を引留め、或いは妨げる何ものも残ってはいなかった。しかし、貞太郎が世界に飛翔する素地は、北陸の風土の中で、既に育まれていたのである。

結 び

小論で取り上げた年譜の誤りは、一体何に起因するのであろうか。幾つかは、大拙自身の回想に於ける記憶違い、或いはそこからの誤った類推に因っていると考えられる。とはいえ、大拙の回想はいづれも九十歳頃のものであるにも関わらず、一部を除くと、概ね正確であり、むしろ誤りの多くは最初の略歴の記述に因るものと考えられる。例えば、岩倉政治氏の手になる『仏教の大意』の巻末に記載された略歴である。⁽³⁷⁾この本は、本来、非売品であり、数多く流布していない。しかし、古田氏や秋月氏の年譜は、岩倉氏が記された略歴の影響を受けていると思われる。

小論で取り扱った時期も含めて、生い立ちから青年期に至る大拙の歩みは、さらに実証的に明らかにされなければならない。さもなければ、増谷文雄氏のように、鈴木大拙論は円覚寺での参禅（明治二十四年）から記されることになる。⁽³⁸⁾確かに、見性の体験は大拙の生涯にとって最も重要な事柄であろう。しかし、その背後に多事多難な青年期の歩みがあったことを見過しにしてはならないであろう。青年貞太郎の生活や苦悩の中に、晩年の大拙の思想傾向は、既に萌えていたのである。

- (1) 古田紹欽『鈴木大拙全集第三十卷』岩波書店、昭和四十五年。なお、久松、山口、古田編『鈴木大拙―人と思想―』岩波書店、西谷啓治篇『回想鈴木大拙』春秋社の年譜や『近代日本思想家辞典』東京書籍、の記述は、この年譜とほぼ同一である。
- (2) 『鈴木大拙の人と学問』（鈴木大拙選集別巻）春秋社、橋本峰雄『清沢満之、鈴木大拙』（日本の名著四十三）中央公論社等の年譜や『日本近代文学辞典』講談社の記述は、この年譜に従っている。しかし、秋月氏の『鈴木禅学と西田哲学』春秋社の第三章『大拙先生の生涯』の記述内容はむしろ、古田氏の年譜に近い。
- (3) 『第四高等中学校一覽（自明治廿年～至明治廿一年）』五〇、五一頁。
- (4) 『自叙傳』（鈴木大拙全集第三十卷）岩波書店、五八九頁。
- (5) 同、前掲者、五八九頁。
- (6) 西田幾多郎博士頌徳会『西田幾多郎の歌』南窓社、昭和五十年、一二頁
- (7) 山本良吉『藤岡博士の思い出』（国語と国文学第十七卷四号）昭和十五年、四〇―四一頁。
- (8) 『我尊会有翼文稿』（西田幾多郎全集第十六卷）岩波書店、五七三頁。
- (9) 『藤岡博士の思い出』四〇―四一頁。
- (10) 『我尊会有翼文稿』六〇―四頁。
- (11) 幾多郎たちは明治憲法発布の日（明治二十二年二月）を記念して、「頂天立地自由人」という文字を掲げて記念写真を撮った。これが我尊会の旗上げと見られるが、貞太郎はこの写真にも写っていない。
- (12) 高坂正顕『西田幾多郎先生の生涯と思想』弘文堂、一九四七年、八頁。
- (13) 幾多郎と良吉には（教室ニ於テ隣生ニソムヤク（徳））とも書き込まれている。ソソとは北陸地方では「ひそひそ話す」の意で用いる。ちなみに、成績は作太郎が一番、幾多郎が六番である。
- (14) 『或る教授の退職の辞』（西田幾多郎全集第十二卷）岩波書店、一七〇頁。
- (15) 『自叙傳』五八九頁。
- (16) 『堀維孝君の「四高三々塾について」を讀みて』（西田幾多郎全集第十三卷）岩波書店、一二―四頁。

- (17) 『自叙傳』五九六頁。
- (18) 上杉知傳『偉大なる教育者「北条時敬先生」』北国出版社、昭和五十三年、二六九頁。
- (19) 『自叙傳』五九六頁。
- (20) Edited by Christmas Humphreys, *The Field of Zen, The Buddhist Society, London, 1964, p. 2.*
- (21) *ibid.*, p. 2f.
- (22) 『自叙傳』五九〇頁。
- (23) 蛸島小学校『百年のあゆみ』昭和四十九年八月には、「第二代校長、鈴木元太郎」の記事がある。
- (24) 『自叙傳』六〇二頁。
- (25) 同、前掲者、六〇二頁。
- (26) 蛸島に於ける貞太郎の記述は、英俣氏の口述と「永松関『蛸島の移り変り』昭和五十二年」によるところが多い。
- (27) 『日本の靈性』（鈴木大拙全集第八卷）岩波書店、一七一頁。
- (28) 『自叙傳』五六八頁。
- (29) 『真宗雜観』（鈴木大拙全集第二十八卷）岩波書店、二四〇頁、二四二頁。
- (30) *The Field of Zen, p. 4.*
- (31) 『西田の思い出』（鈴木大拙全集第二十八卷）岩波書店、三六八頁。
- (32) 『自叙傳』六〇一頁。
- (33) 徳證寺での記述は、現任職新田西麿氏の口述によるところが多い。
- (34) アンカとは加賀地方では青年男子の意である。
- (35) 『四高の思ひ出』（西田幾多郎全集第十二卷）岩波書店、一六頁以下参照。
- (36) *The Field of Zen, p. 4.*
- (37) 岩倉政治『大拙、鈴木貞太郎略歴』（鈴木大拙『仏教の大意』法蔵館、非売品）昭和二十二年、一三八頁以下。
- (38) 増谷文雄『鈴木大拙論』（『鈴木大拙』現代日本思想大系八）一九六四年、筑摩書房参照。